

金剛寺所蔵 絹本着色地蔵十王図の応急処置について

武内 里水

はじめに

金剛寺所蔵の絹本着色地蔵十王図(図一)は、令和六年(二〇二四)十月九日、金剛寺から当館へ寄託された。しかし、カビの被害や経年による甚大な損傷があり、受託時に早期の処置が必要であった。額装で、重いガラスがはめ込まれており、処置の方針には検討を要した。本稿では、受託時に実施した応急処置の内容について報告する。

一 処置概要

作品名 絹本着色地蔵十王図 一面
所有者 金剛寺(滋賀県蒲生郡日野町大谷)
発注者 滋賀県立琵琶湖文化館()
処置年月日 令和六年一月二十九日から三月十七日
処置施工者 株式会社坂田墨珠堂(大津市小野)
処置費用 カビ払い処置 九万八千、二百七十四円(税込)
保存形態整備 九万五千、五百四十六円(税込)

二 作品の構造

本紙種別 絹本着色
本紙法量 縦一〇九・三センチメートル、横五五・四センチメートル
表装法量 〔本紙周囲の表装裂を含んだ法量〕
縦一一一・三センチメートル、横六九・四センチメートル
〔額全体の法量〕
縦一三三・〇センチメートル、横八一・二センチメートル



図一 処置前(額・ガラスのまま撮影)

表装形態

額装、表面にガラスが用いられていた。額裏板との接着はなされていなかった。本紙は裏打、裂にて表装がなされる。表装裂は、本紙周囲に茶地唐花紋金襴、その周囲に白茶地雲子紋綾が継がれる。額裏板に「昭和三十二年九月吉日 金剛寺什物 祈身体健全 住職伴圓照 古話方 小森吉藏 小森市次 小森信次」と墨書がある(図二)。

三 作品の内容

日野町金剛寺は、臨済宗永源寺派の寺院である。寺伝によると、開基



図二 額裏板墨書

を聖徳太子とする。本尊は、重要文化財「木造聖観音立像」である。本作は、当寺院の本堂にて保管されていた。令和六年(二〇二四)四月十七日に什物調査^③を実施した際、当館へ寄託の相談を受けた。

図像は、地藏菩薩と十王を一つの画面に描く(図三)。図像の類例には、静嘉堂文庫美術館所蔵の重要美術品「地藏菩薩十王図」や、笠岡市日光寺所蔵の重要文化財「地藏十王像」などがある。

諸尊の詳細を見ると、中尊である地藏菩薩は、頭光と身光を背負う。絵絹の欠失により

面部がほとんど失われている。右目が僅かに残るほか、頭部や耳の輪郭は視認できる。頭部の形状から、青色の頭巾を被る被帽地藏の可能性が考えられる。左手は胸前に上げて透き通った宝珠を持ち、右手は垂れて右膝頭にあてている。左足を垂下させ、半跏に坐る。左足元には、かすかに蓮弁のようなものが確認できるが、台座の詳細は不鮮明で判別し難い。袈裟、大衣、內衣を着用し、胸の部分はあらわになつている。衣には、唐花円文、草花文などの金泥による細かな装飾文様が施されている。

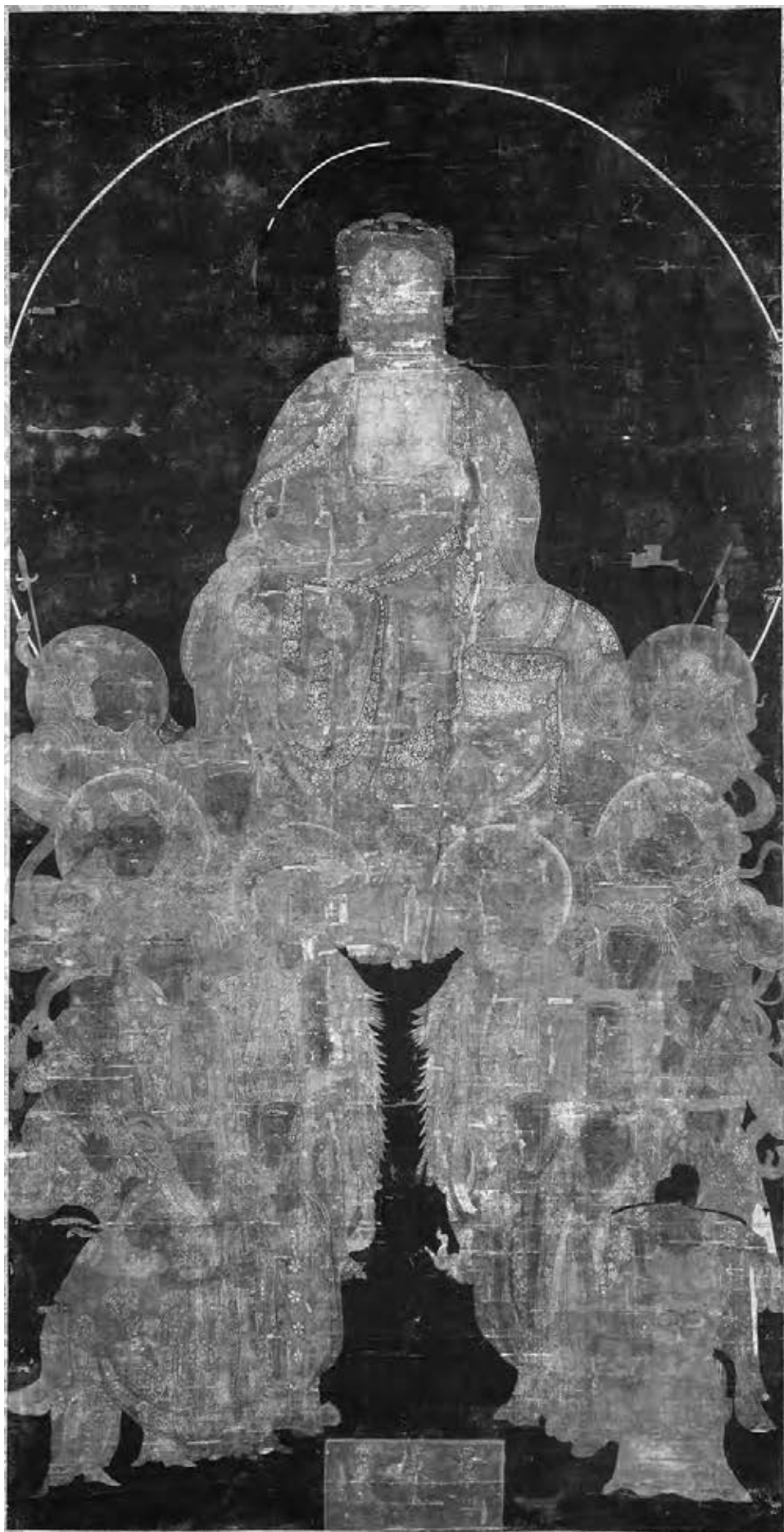
地藏菩薩の膝あたりから、画面下半分には、眷属たちを二十体描く。丸い頭光を背負うのは六体である。このうち四体は鎧や籠手をまとう四天王である。地藏菩薩の左膝横の像は、宝塔と槍を持つ多聞天である。その下の像は剣を持つ。地藏菩薩の右膝横の像は戟を持つ。その下の像は持物が不鮮明である。

画面中央で頭光を背負う二体は天部形で、胸前で合掌し、向き合っている。先に挙げた類似の図像を参照すると、二体は梵天、帝釈天のいずれかであると考えられる。地藏菩薩の左手側の像は、類似の図像では三眼を有す像が描かれる。本図は、面部と胸あたりの図像が失われているため、諸尊名の比定は困難である。

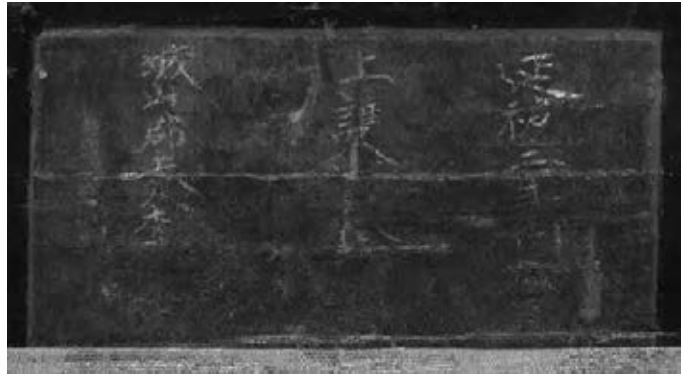
四天王や梵天、帝釈天に囲まれた中で、頭光のない像が二体描かれる。同じく類似の図像から、これらは道明和尚と無毒鬼王^④と判別する。僧形の道明和尚は、地藏菩薩に向かって振り返る姿をとる。

画面下部には、十王を左右に五体ずつ配する。冠を頂き、官服を着用し、胸前で笏を持つ姿で立つ。十王のうち、地藏菩薩の右手側には武装姿、左手側には冕冠を戴く姿で一体ずつ描く。

さらに十王の脇には、二人の人物を描く。地藏菩薩の左手側は、二脚幞頭を被り、袍服を着て笏を持つ判官である。右手側の人物は、髭を蓄え、赤い袴服を着た使者である。使者は、巻物を捧げ持ち、判官に渡そうと、一步踏み出す姿をとる。



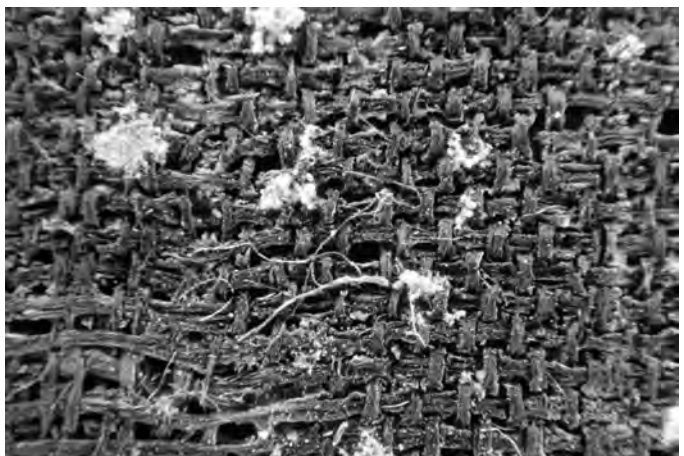
图三 処置前本紙



図四 色紙形部分



図五 カビ・絵絹欠失箇所の一部



図六 本紙カビ箇所拡大



図七 浮きの一部(斜光撮影)

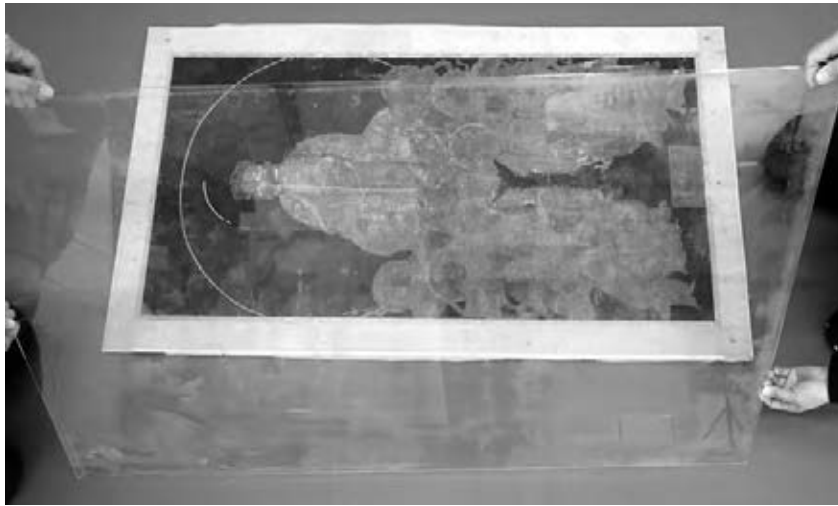
眷属たちの肉身は赤みのある絵具で描き、衣には金泥による装飾文様が施されている。面部や金泥部には後世の加筆と思われる箇所が多い。

背景は後世の加筆か、塗りつぶされている。画面下部には赤色で彩色された色紙形があり、「延祐三年丙辰□ 上護□□ 城山郡夫人□□□□」と金泥で記す(図四)。延祐は中国元王朝の年号で、延祐三年は日本では正和五年(一二二六)にあたる。なお、地藏十王図で、地藏菩薩、十王、梵天、帝釈天、道明和尚、無毒鬼王を一つの画面に描く作例は高麗時代の地藏菩薩像に多い。細密な金泥による装飾の特徴からも、本作は高麗の作であることが考えられる。同寺には延祐二年の銘がある「阿弥陀八大菩薩図」も伝わる⁵⁾。本作の年銘とも近く、来歴の関係性が考えられる。

四 処置前の状況

本紙、表装裂、額の全てに、白色の粉状のカビの付着を確認した(図五・六)。本紙や表装裂には、絹目の中に入り込んだようなカビの付着が見受けられた。表装裂には、鏝の付着もあった。額裏板の棧を留める釘から生じたと思われる。額の留め具は一部破損しており、保存箱は無かった。

カビの他にも、本紙は極めて脆弱な状態であった。裏打層と本紙の間に浮きが多数あり、本紙が大きく波打っていた(図七)。カビの浸食、汚れ、絵具の剥離剥落などにより、画像が不鮮明である。また、絵絹の亀裂や剥離による欠失箇所も多数ある。欠失部には、絵絹の裏から施された裏彩色の顔料



図八 ガラスの汚れ

が露わになった箇所もある。本紙の裏に貼られている肌裏紙も露出して
いる。濃く黒い色の肌裏紙、墨肌の使用も確認できる。本紙とは異質な絹
での旧補修や、加筆箇所も混在している。

中でも、保存上の大きな課題となったのが、額表面のガラスであった。
ガラスは、縦二二二・〇センチメートル、横七〇・〇センチメートル、厚
さ三ミリメートル、重さ六キログラムと重く大きいものが使用されてい
た。ガラス表面の汚れに発生したカビの付着も見られた(図八)。ガラス

の曇ったような白色の汚れ
に対し、エタノールにて清
拭を試みたが、汚れは除去
しきれなかった。この汚損
したガラスが本紙と圧着
し、汚れが画面に接すると
ともに、通気性が悪い状態
となっていた。このままで
は、さらなるカビの繁殖が
懸念された。また、本紙と
裏打層との間の糊浮きが著
しい部分もガラスで加圧さ
れていた。浮き部分の欠失
や顔料の剥離剥落の進行が
懸念され、危険な状態であ
った。

五 処置方針

まずは、カビによる汚損

の拡大を阻止することが急務であった。また、受託時の曖昧な処理によ
り、収蔵庫内にカビなど、文化財の有害生物を持ち込まないように充分
に注意する必要があった。そのため、ガラスによる作品表面の環境悪化
と、脆弱な本紙への影響の改善を要すると判断した。カビ払いに加え、
保存形態整備も実施することとした。処置は、保管に耐えうる状態とす
ることを主眼とした。

まずは、令和六年一月十五日から十八日の期間中、他の新規収蔵品と
共に当館にて殺菌のための燻蒸処置を行う。燻蒸後、株式会社坂田墨珠
堂工房にて、カビ払いを行う。錆、虫損の穴、浮きなどによる亀裂な
ど、汚損や欠失の拡大が懸念される箇所への応急処置を実施する。これ
に加え、額とガラスを除去し、新調する保管箱にて平置きで保管する方
針とし、保存形態を整える。ただし、取り扱い時や保管時の不安定さが
懸念された。そのため、簡易な下地を新調することとした。なお、今回
は絵具や絵絹に対して本格的な補強処置を行わないため、下地への貼り
込みは、本紙にテンションがかからないように注意することとした。

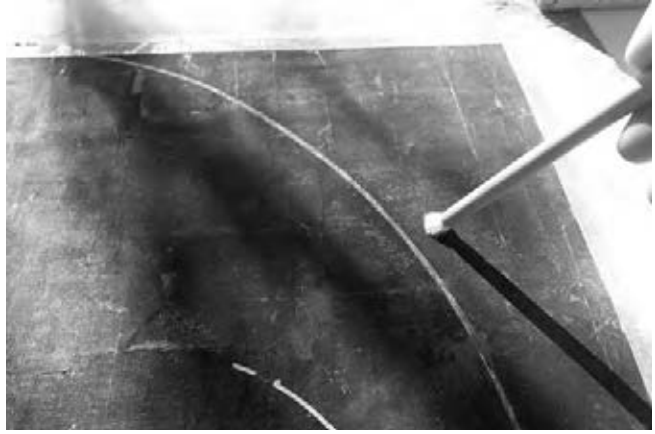
六 処置工程

【燻蒸処置】

エキヒュームS[®]を用いた燻蒸を実施した。施工はイカリ消毒株式
会社が行った。当館内に、テントを設置し、テント内に薬剤を投薬する
処置を行った。処置後、応急処置のための搬出までの期間は、収蔵庫内
へ収納しなかった。収蔵品とは隔離した場所^⑤にて保管した。

【カビ払い及び保存環境整備】

(一) 処置前の調査・撮影
処置前の状態の撮影、および調査を行った。



図九 カビ払い



図十 下地への貼り込み

- (二) 額装の解体
額ガラスを取り外し、作品を額から取り出した。
- (三) エタノール塗布テスト
エタノールを染み込ませた綿棒の先で本紙に触れて、絵具等への影響の有無を試験した。
- (四) カビ払い処置
柔らかい刷毛、先を切った筆等を用いて、絵具に注意しながらカビを払った(図九)。エタノール七〇パーセント水溶液を用いてカビを除菌した。
- (五) 浮き箇所補修
絹の浮き部分に、小麦澱粉糊と筆を用いて、糊を差して接着した。

(六) 錆の除去

表装裂に見られた錆を、針先で除去した。

(七) 虫損箇所補修

表装裂に見られた虫損箇所を、裂に似寄りの色の補修紙で繕った。繕いは、裏打層の裏面から施した。

(八) 下地の新調

簡易な組子下地に、三層の下貼りを施した。

(九) 下地への貼りこみ

作品の四周裏面、裏打層に紙を継いだ。新調した下地に、紙の部分貼りこんだ(図十)。

(十) 収納・報告書作成

中性紙の被せ蓋箱を新調し、作品を収納した。墨書があつた額の裏板も共に箱内に収納した。処置者が、処置についての報告書を作成した。

七 処置後の状況

燻蒸により殺菌処理し、表面の付着物をカビ払いにより除去した(図十一)。表面の白色の付着物が除去され、一部、画像が鮮明となった。額装は外し、新調した下



図十一 カビ払い後の本紙拡大



図十二 処置後(中性紙保存箱に収納)

八 処置中所見

処置中の所見は次の通りである。

- カビ被害や留釘の錆の状況から、湿気のある状態で保管されていたと考えられた。本来は表面を保護するための頑丈な額ガラスであるが、作品の置かれる状況や状態によっては、必ずしも有効ではないといえる。

- 諸条件の前提を考慮せずに考えれば、今回の処置により発生した課題は、額として立て掛けることができなくなった点である。取り扱いは基本的に水平に保ちつつ行い、平置きできる広い収納場所が必要となる。しかし、作品の状態の安定化を優先とし、保管場所である当館の状況を考慮すれば、今回の処置で、取り扱いや収納に問題はないと判断した。

地に貼りこんだ(口絵三)。ただし、裏打部分に継いだ紙のみを貼りこんだ状態とした。将来、解体修理を実施する際に、容易に下地から取り外しが可能な状態とするためである。表装法量は、下地を含む縦一一二・〇センチメートル、横七〇・〇センチメートル、厚さ二・五センチメートルとなった。

処置後は、新調した中性紙保存箱に収納した(図十二)。今回は保管のための必要最低限の処置であり、本紙は、依然として絵絹の糊浮きや脆弱な絵具層が多い状態である。そのため保管箱内では、包紙や合紙などは入れず、保管箱の蓋を被せるのみとした。額ガラスと額枠については、所有者に相談し、廃棄することとした。

ら、額装は後世に新調されたものであると分かった。今後の修理の機会には、六十年程額装とされていた本紙の状態も考慮しつつ、表装形態には十分に検討を要すべきである。

- 本紙裏打紙には、墨書のある反古紙が用いられていた。作品の来歴も含め、使用画材や表装材料の詳細については今後の研究課題としたい。

- カビの被害がある作品を館内に受け入れる際には、他の収蔵品への感染を予防する必要がある。今回はカビの発生が明らかに視認できる状態であったが、画面をつぶさに観察し、殺菌処置の必要性の有無を確認しなければならぬことが分かった。そして、問題が見つかった場合には速やかに対処できるように準備しておくことが重要である。

おわりに

今回の処置を通して、できるだけ速やかな対処が必要な場合には、様々な条件による短所、長所を把握・比較する必要があると分かった。今後も、より作品を良好な状態で保存するための手段を、適格に判断していけるように努めたい。

なお、今回の処置により、絵画表面の環境が変化したことの影響が無いかについては、引き続き注視しながら保管を行うこととする。

現在は新築館への移転のため、長期休館中の当館であるが、再開館後は収蔵品を公開する機会も増加する。今後の公開の機会には、本格修理が必要であることも申し添えておきたい。

謝辞

最後になりましたが、応急処置の必要性をご理解いただきました所蔵者の金剛寺様に心より御礼申し上げます。

また、本稿は応急処置を実施いただいた、株式会社坂田墨珠堂作成の応急処置報告書をもとに筆者がまとめ直して、所見を加えたものです。

株式会社坂田墨珠堂の坂田さとし様をはじめとする装演師の皆様にも、ここにお名前を記し謝意を表します。

(たけうち さとみ・滋賀県立琵琶湖文化館学芸員)

註

一 処置監督には、筆者の他、左記の者が参加した。

和澄 浩介(当館)

萬年 香奈子(同)

二 日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史 第二巻 中世編』滋賀県日野町(二〇

〇五)参照。元は浄土宗の寺院であった。

三 什物調査は、左記の者が担当した。

古川 史隆(滋賀県文化財保護課)

和澄 浩介(当館)

岡井 健司氏(日野町生涯学習課)

鐘 真史氏(日野町生涯学習課)

山本 泰一氏(元徳川美術館)

四 道明和尚は『還魂記』、無毒鬼王は『地藏菩薩本願経』の説話に由来をもつ。

五 日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史 第五巻 文化財編』滋賀県日野町(二

〇〇七年)参照。

六 公益財団法人文化財虫菌害研究所の認定薬剤、エキヒュームSは令和七年(二〇二五)

三月に販売中止となった。

七 当館は現在、新築館への移転のため、休館中である。燻蒸後から、搬出までの期間は、

隔離のため、使用していない展示室に保管した。

参考文献

・中野照男「高麗時代の地蔵十王図」『美術史研究』第三五六号 一九九三年)

・大林賢太郎著『装演文化財の保存修理 東洋絵画・書跡修理の現在』(国宝修理装演

師連盟 二〇一五年)

・『平成23年特別展 法然上人と岡山』(岡山県立博物館 二〇一一年)

・『特別展 地獄絵ワンダーランド』(三井記念美術館、龍谷大学龍谷ミュージアム、NH

Kプロモーション 二〇一七年)

・『高麗仏画―香りたつ装飾美』(公益財団法人泉屋博古館、公益財団法人根津美術館

二〇一六年)

・『特集展示 うるわしき祈りの美―高麗・朝鮮時代の仏教美術―』(九州国立博物館

二〇二三年)



口絵10 絹本著色地藏十王図
(日野町・金剛寺蔵、応急処置後写真)

滋賀県立琵琶湖文化館

研究紀要 第四十二号

発行 令和八年三月

編集発行 滋賀県立琵琶湖文化館

印刷 株式会社モリワキ印刷